

ミニ地球バイオスフィア2 ツーソン アメリカ

1994年視察

アメリカにミニ地球があるというので興味津々で見に行くことにした。老人の町フェニックスから更に4時間ほど南に下ったツーソンの砂漠の中にそれはあった。とてつもなく大きなガラス張りの温室で、外周りを一周しながらガラス越しに中の地球を覗いて歩くのである。

温室の中には大きな海があり（波までつくられる）、その水が蒸発して天井面のエアコンで冷やされて雨になり、熱帯雨林～サバンナ～温帯そして砂漠までの道程を経て生態系の再循環を行っている。その過程で植物が繁茂し、光合成によって有機物を生産して食物連鎖を起こすと同時に、炭酸ガスと酸素のバランスをコントロールしている。もちろん、これは実験施設であって、男女8人の被験者が2年間、稲や麦を育て、豚を飼い、魚を釣って自給自足していくのである。電話ができる以外は、完全に外界と遮断された生活である。

このミニ地球をみて「地球が作れるなんてスゴイ！」と目を輝かせる人もいれば、「今更・・・」といてあきれられる人もいる。今更このような純粋培養の地球をつくって一体どうするつもりなのか？

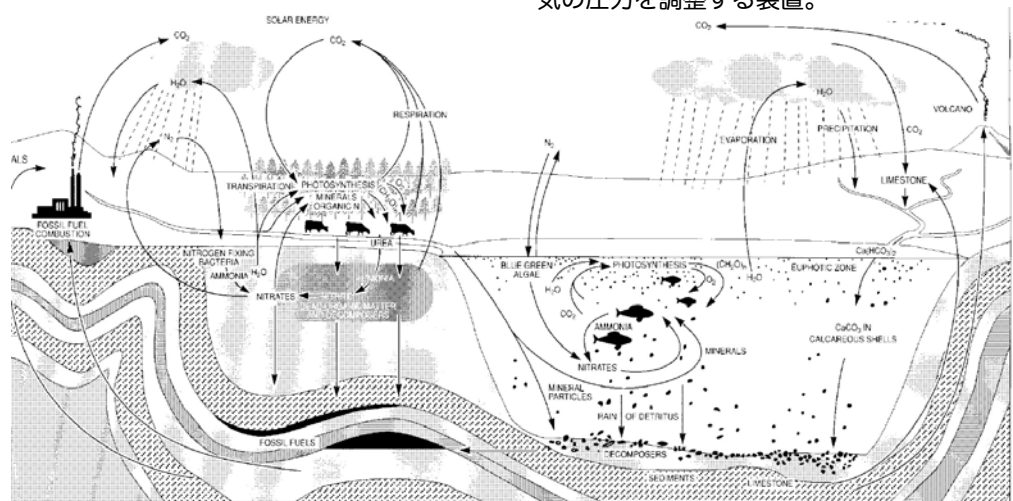
よくよく考えてみると、日本の昔の農村風景はミニ地球そのものだった。そこにはハイテクなど存在せず、彼等は教わることなく生態系と共生する知恵をもっていた。なのに都会に住む現代人の私は野菜をつくることもできないし、自分の排泄物を処理することもできない。ガラスの中の8人の被験者は外界と遮断されて、まるで監獄の中にいるようにみえた。しかし、彼等の方からすれば、私の方こそ瀕死状態にある地球の中でアップアップしている哀れで愚かな生物に見えたとはいえない。



砂漠のど真ん中に巨大なガラス張りの温室がある。これがミニ地球だ。



鷺が羽根を広げたような形の建物が居住棟。8人の被験者が外部と閉ざされて生活している。左に見えるドームは温室内の空気の圧力を調整する装置。



ミニ地球の中は生態系の循環が行われ、循環だけで生活する。

KEN GRUAN. SOURCE: SCIENTIFIC AMERICAN